

ムゲンニュース

第14号

発行日：2022年2月

発行：NPO法人ぴあ ルーテル作業センタームゲン

住所：愛媛県松山市木屋町1丁目9番地2（伊予銀行本町支店北側を入って30m）

木屋町1丁目9番地4（店舗）

営業時間：8:00～16:00 休日：土・日・祝祭日

TEL・FAX：089-924-8533（代表） 089-996-7701（店舗）

E-mail:mugen@joy.ocn.ne.jp

目次

ぶどう狩りの思い出 2

コロナ禍の中のメンタルヘルス 5

みんなの広場 6

あとがき 13

みんなで行った、ぶどう狩りの思い出







コロナ禍の中のメンタルヘルス

2020年はコロナ禍で明けて、コロナ禍の中で暮れそうです。人類はこの一年間、新型コロナウイルス感染が人間の生命を脅かすリスクに、手探りで対応してきました。一方、感染拡大を防ぐために対策したことが、社会を混乱させるリスクを作ってきました。

当初、入手できた情報は断片的なものばかりで、未知の脅威であること自体が私たちの恐怖心をかき立てました。日々が過ぎ、感染弱者が明らかになると、弱者の傍にいる人たちは、自らの感染で弱者の命が失われることを恐怖するようになりました。また、人々の間に分断が生じて混乱するさまにも恐怖を覚えました。

今日、多くの人が不安を感じているでしょうが、そのことだけで病的と捉える必要はありません。現に命が脅かされるリスクがあり、心ある人ならば恐怖心が生じて当然の状況を私たちは過ごしてきたからです。それは、「私たち人間には不安と付き合う力が存在する」ということの証としてよいことだと考えます。

しかし、コロナ禍の中のことは心労を強いるものばかりで、コロナ禍が長引くに連れて、私たちの脳には疲労が蓄積してきています。何気ない日常のものが心を癒すものであったことは、それを失って悟ったところですが、その代わりを作ることでも疲労が生じます。

この先、こうした疲労の蓄積が私たちを弱らせてしまう可能性があります。少しでも弱ると、身体の余力が失われ、心にゆとりがなくなります。さらに弱ると、不安と付き合うことができなくなって、落ち着いて考えられなくなります。そうなると、リスクに対して「正しく恐れる」ということが不可能になります。

カラダの健康

快



三好神経内科
三好典彦 医師

著作「漱石の病と、夢十夜」
「こころの病を生きる」(佐野
卓志と共著)
愛媛県ラグビー協会理事

このような悪循環から私たちのメンタルヘルスは不安定になりますので、それを防ぐためには、弱りつつある自分に早く気づき、その自分をいたわることが最も大切です。具体的には、きちんと休息を取ることがとても重要です。コロナ禍が生じてから休んでばかりと思う人もいるでしょうが、それは社会的な意味の休養であり、気働きはずっと続いていて脳の休息は不足しています。

また、現代ならではのことが、私たちのメンタルヘルスに影響しています。昔は疫病の流行も、大地震や大洪水と同じく天災の中の天災でした。節分の豆まきは疫病を持ち込む鬼を追い払うための宮中行事が起源だそうです。現代人にとって疫病は、特定の病原体による感染症で、人智で制御可能にする対象です。

確かに、いつかは制御できる時が来るでしょう。しかし、今はまだ制御不能の状態で、感染するしないも、重症化するしないも確率の問題です。このことは、被害の発生が運不運で左右されるということであり、コロナ禍が今のところ天災であることを意味しています。

そう捉えると、感染した人は気の毒な被災者になりますから、いたわりの心で包む存在と理解できます。また、マスクや自粛生活は、減災のための協力として温かい気持ちで受け入れることができると思います。

みんなの広場

白球少女」 #1 蘭(らん)と愛

佐野秀樹

「100円のお返しです。」「えっ？お釣り200円じゃないの」「す、すみません。え～と「取り消し」～「一括取り消し。」ブー「きゃっ」「何やってんの、後ろ詰まってるのよ」店長が飛んでくる。「すみません、お並びの方こちらのレジへどうぞ」二人目以降、店長のレジに大移動。「もう。遅くなって。『ハイキング』が始まっちゃったじゃない」…「愛ちゃん。もう3カ月。そろそろ仕事を覚えてくれないと」「す、すみません」(私だって好きで働いてるわけじゃないのに。お父さんの仕事、早く決まらないかな)…桑原愛。13才。恋だ、部活だ、皆が胸ときめく中学生生活を送る中、一人コンビニで働き、家計を助ける。父親がリストラされたのが、3か月前。愛は、慣れ親しんだ学校を辞め、定時制中学に転校。昼間は6時間働き、夜、学校へ通う。「六本木堀越中等部定時制」午後9時、疲れた体を引きずって下校中、硬式ボールが転がって来た。「すいませ～ん」投げ返す愛。「えっ？凄い肩。君、野球経験は？あっ自分は野球部の春風といいます。ちょっといいかな？」…薄暗い照明の下、半ば強引に入部テストが始まる。「あの肩は只者じゃない。」蘭の予感当たった。ずぶの素人目がけて五分の力で投げる蘭。豪快な空振り。しかし、なんと魅力的なスイング。監督自らフォームを教えると…「カキーン」外野に鋭いライナーが飛んでいく。3球、4球、目を奪われる蘭と部員たち。5球目。防弾ネットを軽々と越えていく。「て、天才だ。桑原さん、一緒に野球しませんか？」その日から、愛の人生は一変した。打ち、走り、そして何より沢山の仲間ができた。「楽しい。これが青春？」教わることだらけ。でも日々上手くなっていく快感。「ただいまー」両親にひとしきり野球の話をして、風呂に入って寝る。翌日のコンビニ。「あら、エコバッグ忘れちゃったわ。レジ袋もらえます？」「こちらの無料の紙袋にお入れしましょうか？」「お嬢ちゃん、中学生？偉いわね～どうもありがとう。お仕事がんばってね」「ありがとうございました。」「愛ちゃん、今の対応良かったよ」珍しく店長に褒められる。午後6時。「お疲れ様でした。」仕事を、そして勉強も終え、グラウンドへ。気付けば鼻歌を歌っている。「遅くなりました」萩野目監督が迎える。「おおっ来たね愛ちゃん。来週、紅白戦をするから。君は1番サードだ。今日は守備の基礎を教えるよ。」

#2 紅白戦

ある日のお昼休み。「春風蘭」をスマホで検索する愛。有名人なのは風の噂で聞いていた…春風蘭。六本木堀越高等部定時制1年生。日本女子で唯一、常時150キロを投じる女子最強投手。昨年の定通制全国大会では、「高校NO.1投手」野見山晃に投げ勝ち、チームを優勝に導いた。また、モデルとグラビアも兼ねる通称「モグラ女子」。16才の若さで、パリコレから招待され、パリっ子たちを魅了した。「オトナミューズ」「リー」「ポップティーン」「ニコラ」「スイート」ファッション雑誌のカバーを独占。さらに成績も上位。全日制も含め、男女問わず憧れの的のスーパーJK…「へ～そうなんだ」そんな蘭との対決は必然的に実現した。いつもの練習。愛を見守る監督の萩野目は、紅白戦を画策する。中高はバラバラだが、紅組には蘭。そして白組に愛。蘭と愛が、別チームで対戦する。それが見たい萩野目だった。「試合か～」「愛はいつも通りやればいいよ」試合前、蘭が声をかける。プレーボール。紅組の先発は、蘭では無く、二番手の米倉。男子だ。平日のデーゲーム。授業を終えたギャラリー達がグラウンドを囲む。お目当ては蘭だ。しかし彼らが目にしたのは…1番サードでスタメンの愛。米倉の初球ストレートをフルスイング。レフトへ。名刺代わりの先頭打者初球ホームランだ。「ほ～う」部員と萩野目、一同見とれる。そして生徒たちも。「誰だ？あいつは。」二打席目は右方向。120メートルは行ったか。蘭の見守る中、ダイヤモンドを一周する愛。「監督、彼女すごいですね」スカウトした蘭も驚嘆。「B組の桑原？」地味な存在の愛。知名度が一気に上がる。そして愛が三打席目に向かう中、蘭がマウンドへ上がる。空気が一変する。「おい！蘭が投げるぞ」ついに実現。愛VS蘭。高校女子NO.1ピッチャーと、堀越、期待の新星。初球、ストレート。150キロ。見送る愛。「速い」2球目、ストレート152キロをフルスイング。空振り。3球目、同じく152キロをフルスイング。「剛速球対フルスイング」見応えある対決、蘭の勝ち。盛り上がる親衛隊。そして、最終打席。「相手は、女子最強投手。とにかく思い切って行こう」153キロ。相変

わらずの真っ向勝負。2球目155キロ、自己最速。ファールで食らいつく愛。「声を押し殺して見つめるギャラリー達」そして3球目。ストレート一本で待っていた愛が捉える。高〜く上がったセンターフライ。そのまま伸びて伸びて伸びて、センター見送る。ホームラン。「お〜」解き放たれた輩(やから)たちがグラウンドになだれ込む。3-6。白組の勝利。「愛！」打たれた蘭が嬉しそうに駆け寄る。そして愛は握手攻め。六本木堀越にもう一人のスーパースターが誕生した瞬間だ。ホッとする間もなく、監督の声が飛んでくる。「桑原、特守だ！」「はい！」3つのエラーは、全てイージーミス。4番サードで育成するつもりだ。1日2時間。マンツーマン指導。守備も打撃も。荻野目は思った。「期待以上。この子ならプロでだって通用する。大切に育てないと。」その日も両親は待っていた、愛の帰りを。「愛、紅白戦はどうだった？」照れくさそうに「うん、ホームラン3本」「凄いじゃないか。実は父さん、新しい仕事が決まってな。もう、愛は働かなくていい。全日の学校だって行けるぞ」「お父さん、おめでとう。でも私、今のままがいい。仕事も定時制も続けさせて」「そっか。分かった。愛のやりたいようにすればいい。母さん、もう一杯。今日のビールはなんて美味いんだ。愛も飲むか。」「ゲエ、にがいよ〜」「ハハハ」桑原家に幸せが戻って来た。そして翌日のコンビニ。「150円のお返しになります。ありがとうございました。」嬉しそうに寄って来る店長。「楽しそうだね、愛ちゃん。いつもありがとう。これ、お給料。時給上げといたからね。」「ありがとうございます店長」常連客が友達を連れてくる。「ここのレジは、とっても感じがいいのよ。あっこのお嬢ちゃんよ」「いらっしやいませ！いつもありがとうございます」桑原愛14才。青春真っ只中・・・半年後、「プロ野球・女子選手解禁ドラフト」に、蘭と共に招かれる。

終わり(連続して書いている「白球少女」シリーズのスピンオフ小説です)

ムゲンではトラブルがあるからこそ、お屋のご飯がうまいのだ

佐野卓志

確定死刑囚はずっと独房にいます。裁判は終了してしまっていますから、いつ執行があってもおかしくないのです。執行のある日には、午前10時までに看守がやってきます。隣の房の前で、死神の足音が止まるかもしれません。やがて房から出されて、自分で歩く人もいれば、引きずられるように刑場に連れて行かれる人もいます。自分の番ではなかったと、心底安堵です。自分は今日1日生きていきます。もちろん明日はどうなるのかわかりません。

僕は若い時に、死廃の運動をやっていて、死刑囚とも有期刑囚とも文通や面会をしていましたが、その時の知識です。僕も歳をとってしまって67歳ですが「実は生きている万人が執行を待つ、死刑囚ではないのか？」と思うようになりました。いつ看守が自分の房の前で止まり、刑場へと引っぱっていくかわからない。1年前に、心筋梗塞になり救急車で運ばれ、死にかけましたし、死は突然目の前に現れます。それほどに命は頼りないのです。

さて今から50年近く前、僕が20歳の時、大学1年の時に統合失調症を発病して、5年間入院しました。高校を卒業して、大学浪人の生活をするために上京し、初めて一人暮らしをしました。発病前でしたが、とても孤独で寂しくてたまりませんでした。高校時代には、同級生の男子にラブレターを出して、手酷い振られ方をして孤独でしたし、高校時代に「いくら勉強をしても、自分は何も知らない」ことに絶望していました。

退院後には、仕事している健常人に対するコンプレックスや、「仕事面や結婚面でも、高校の同級生からも大きく遅れてしまった」という焦りから、「とにかく仕事

をしないといけない」と思い、様々な職を転々としました。30歳の時に、コンピュータシステムの立ち上げの仕事に携わり、朝から夜遅くまで、土日もなく働いたために、2週間くらい経つと眠れなくなり鬱になり、再び入院しました。半年間の入院でした。その結果、自分はまともには働けないことを自覚し、障害年金をもらい始めました。

さて退院後には、この発病前の孤独や寂しさが耐え難かったことを忘れられず、「仲間づくりだ！患者会を作ろう！」と思いました。当時松山では味酒心療内科関係の「ごかい」という患者会が活動を始めていたし、「竹の会」「あがきの会」とかの小さな患者会がポコポコとできていました。ごかいは2～30人と規模が大きく、毎日集まって食事会をしていました。患者会が継続して維持されるためには、給料をもらって世話係をする健常者が必要だと僕は考え、作業所というスタイルにすれば、行政からの援助金が出るとふみました。それで何年もかかって、古本を寄付によって大量に集めて、バザーで資金を作り、古本屋を開きました。数人が交代で店番をして、僕と波津子さんと毎日食事を作り始めました。平成元年のことでした。

行政にも行き、援助金の話をしましたが、他に作業所は家族会のものが1ヶ所しか例がなく、「商売でやっているのだろう」と、全く取り合ってくれませんでした。以後10年くらいボランティア経営が続きました。ごかいからは「作業所というのは社会復帰路線だ！」と批判され、当時ごかいも「変な古本屋」を経営していたので「ごかいの真似をした！」とも言われていました。ムゲンは常時、統合失調症者が4～5人集まっていたましたが、古本屋というオープンなスタイルが幸いして、お昼ご飯を囲んで、市民運動家や中国人留学生や家出した娘さんや、様々な人たちの交流の場になっていました。当時は病院デイケアもほとんどありませんでしたから、統合失調症者を中心に、患者が集まれる患者会がポコポコとできていったのです。

お笑い牧師のルーテル教会とも深く付き合っていました。行政交渉を再開しようと、牧師さんや父やその他関係者が集まって行政に行き、交渉の結果「キリスト教会などの社会的に信用のあるバックがいて、窓口になってくれたら、援助金を出そう」ということになり、それまで「障害者自立の店ムゲン」という名称だったのを、ルーテル教会が建てたということにして「ルーテル作業センタームゲン」に改めました。僕たちと同時に、ごかいの「変な古本屋」も援助金をもらい始めました。

それからさらに15年くらいたち「障害者自立支援法」ができて、NPO法人になれば、キリスト教会が付いていなくても、自前でお金が出るようになりました。就労継続支援B型事業所にもなり、規制緩和で就労支援施設もたくさんできてきました。ムゲンの職員も5人になり、ようやく安定経営になりました。

さて新型コロナの流行が始まり、手洗い、検温、換気をするようになり、ホテルのアメニティーの下請け仕事も滞るようになって、仕事も無くなってしまいましたが、マスクは作っています。緊急事態宣言も各地で出たり解除されたりの繰り返しですが、今はホテルの仕事も少しはもらえ始めています。

30年以上かけて、ムゲンも大きく変わってきましたが、一貫して僕が考えてきたのが、寂しさを感じない「居場所」としてのムゲンです。就労支援の中で、「確実な作業と賃金」の方に重心を移してきても、仕事のできない人も、なんとか作業を見つけています。昔ムゲンは「作業をしない作業所」だったのですが、作業をやっている

たほうが、皆さん間が持つようになったようです。ムゲンもメンバー、20名近くが毎日来ていて、1年間に何人かは入れ替わっていきますので、「ムゲンがあらゆる人の居場所になるのは不可能だ」とも思います。他所でうまくやっていける人はぜひ頑張っ欲しいと思います。他の作業所に変わって行った人も、久々「元気でやっている」と聞くと、とても懐かしいものです。

僕は長く職員をやってきて、「メンバーには機嫌よくきてもらって、機嫌よく帰ってもらう」というのがモットーになっています。福祉は「お客様は神様です」というサービス業だと思っています。でも別の職員は「メンバーにも金をもらえるレベルの労働者を目指してもらいたい」という人もおり、また「常識的に見て足りないところは、指導すべき」という人もいます。世間には色々な人がいて当たり前ですから、方針が違うのも、別に構わないだろうと思います。

もちろん今の就労支援施設でも、主にメンバー同士、お互いに無距離なトラブルはしょっちゅうで、僕たちも平常に戻すために関わって行きます。大きなトラブルなら、外部の相談員さんや行政の人も巻き込んで、チームで解決に当たることもあります。

京都の患者会である「前進友の会」のえばっちくんが「施設内患者自治会を作ろう！」という主張をしています。とてもいいじゃないかと思います。昔ムゲンが小さかった頃には、それ自体、患者自治会のようなものでした。しかし今では大きくなって施設としてシステム化してしまっているので、今一度変革するためにも、患者自治会があればいいと思います。僕も「いつ引退しようか？」という感じですし、メンバーの中からリーダーができればいいと思っています。月に二回、全員が食堂に集まって開いていた運営協議会、今は「密になりすぎる」という理由で、中止しているのですが、僕が司会をしていて、皆さんに発言を求めても、誰からも発言がないことがほとんどです。強制的に順番に一言を求めても、「パス」をする人がほとんどです。患者自治会は、道が遠いなと思います。草の根民主主義を目指す方向性としてはいいのでしょうか。

思い出せば、イデオロギーなどないままに、患者の集まりは、昔からありました。僕が入院していた頃の堀江病院の院内には「道草」というカラオケ喫茶があり、運営や飲み物作りとかを入院患者がやっていました。政府の退院政策など何もなく、閉じ込めておくだけだった頃の精神病院です。毎日病棟では、入院患者さんのカラオケの音が流れてきていました。ピカピカの建物に建て替えを行なってから、喫茶はなくなったようです。建て替える前には、冷暖房もなく、冬は室内でコートを着て丸くなっていました。お風呂ではインキンが流行り、皆さん感染していました。夏には男性患者は屋上で集まり、裸になりホースで水を掛け合って、水浴びをしていました。懐かし思い出です。

関西で一番ベッド数の多い松山記念病院では、そういう院内喫茶はなかったですが、最近になって、敷地内にB型を作り、喫茶部にしているようです。ずっと昔には、記念病院のそばの商店街に「(男性の)いま子姉さんのお店」というお酒も出す店に、記念病院の患者さんたちが、常連になって溜まっていたと聞きました。建て替え前の記念病院の病棟は、空気の淀んだぼろっちい木造アパートのようでしたが、病棟の売店は当時からありました。

閉じ込められていた患者さんが「助けてください、自分は病気ではありません」と書いた紙を窓から落として、それをごかいの人が拾い、笠先生たちが動いて救出した、という伝説もありました。

僕が九大病院で入院した時も、夜が長くて暇なものだから、入院患者さんたちは食堂に集まって、お菓子をつまみながら、ラジカセに合わせて、カラオケ大会を毎晩やっていたものです。中心になっていた患者さんたちが退院していくときにお互いの名簿を作って、「連絡を取り合おう」と話しました。その後の病棟では、夜のカラオケは禁止の通達もあり、やがて消滅したようです。

さて、誰しもが「死」という究極の寂しさを抱えているのが、人というものです。「居場所」の大切さを身に染みて感じる人でなくとも、みんな自然に就労支援の場でも居場所を見つけていけることこそ、ムゲンらしさだと感じています。ムゲンを辞めてしまうと、引きこもってしまい、何日間も誰とも一言も話さない人もいます。僕たちがいなくなった後、「居場所精神が次へと伝わるだろうか？仕事だけの場所になりはしないか？」とも感じています。「居場所」という僕のこだわりも、根っこのところで、僕自身が寂しがりであったことが大きかったです。そして昨今の障害の軽傷化に伴い、重度障害者の間では過去にあれほど課題に登った「自立」だとか「当事者意識」だとかは、ますます薄れていく気がします。障害者の権利を主張する当事者が、いなくなっていく気がします。制度化された支援相談員も、不満の解消のためのガス抜きの部分もあると感じています。

今まで僕と波津子さんは「近所の世話好きおじさんやおばさん」として、お世話を焼いてきたつもりなのですが、メンバーと親密になればなるほど、メンバーから怒りをぶつけられる、嫌われる、という経験をしょっちゅうしてきました。過去に虐待やいじめの育ちの人も多く、普段は心の傷に蓋をして生きていても、一旦心を許すと、怒りの矛先を身近な人に向けて攻撃してくることが、実に多いのです。病者の家族での身内の殺人事件が起こることがありますが、似た原因もあるのだろうと思います。僕らにとっては全く理不尽な経験なのですが、回数を重ねて僕たちも年取ってからは、「常に距離をとって付き合う。本音で付き合うよりは、浅く嫌われない物言いが好ましい」と考えるようになりました。この経緯を新しい職員さんにわかってくれというのも、無理な話ですが、誰しもが歳をとるに従って、気も弱くなり、「人から嫌われたくない」という傾向にもなるようです。僕たちが引退とかすれば、また新しいスタイルのムゲンを模索していくかもしれませんし、引退後は、僕も一人の死を待つ死刑囚として、お迎えが来るまでニコニコと楽しく庭いじりとかして過ごしたいものです。

あとがき

2020年春

佐野卓志

これを書いている5月の時点で、松山市の感染は小康状態で、オリンピックについては政権とIOCのわがままで、中止される気配はありません。

ムゲンでのコロナ対策も去年から続けています。朝の全員の手洗いと検温。昼ご飯は男女2グループに分けて、時間を別々にしての黙食です。普

段ならせっかくのおしゃべりの時間なのですが、食事中はシーンとしています。

さて、寄付のお願いです。ムゲンメンバーの日本各地で開催される研修会への参加の交通費とか宿泊費とかに使うお金は、公的支出が難しいために、募集をしています。メンバーの中には、旅行も行ったことがないという人もいて、旅行がてらの参加です。一口3000円で郵便振替01640-7-74936、宛先はNPO法人ぴあです。

寄付といえば、僕は個人的にとっても寄付が好きです。「国境なき医師団」と「グリーンピース」には口座引き落としです。あと年に一回ユニセフと各地の寄せ場にも年末に振り込んでいます。寄せ場というのは古くからある労働者の街ですが、東京は山谷、横浜は寿町、大阪は釜ヶ崎、名古屋は笹島とかです。元過激派やキリスト教会が協力して、日雇い労働者の仕事の無い、長い正月休みの間の凍死や餓死を防ぐために、越冬闘争として毎晩夜回りして、毛布や食べ物を配っています。年に一回の屋台やステージでのお祭りもやっています。参考までにこれら振込先です。もちろん米や味噌の現物給付も歓迎しています。

山谷労働者福祉会館運営委員会 郵便振替00190-3-550132

寿越冬闘争実行委員会 郵便振替00240-9-45714

釜ヶ崎ディアコニアセンター喜望の家 郵便振替 00940-2-95205

名古屋越冬実行委員会 郵便振替 00840-9-11541

これらの越冬闘争ももう40年以上続いています。僕も大学浪人時代を東京で過ごし、日雇いのアルバイトもやったことがあります、とてもきつくて、統合失調症発病前のストレスの一つになったのです。実家に対する反発心から、仕送りを断って下北沢のアパートで暮らしていた頃のことです。僕の若い頃はまだ高度成長期の名残りとして、多くの日雇い労働者を抱えた寄せ場が機能していましたが、小泉構造改革以来、労働者の基本的な権利を剥奪された、非正規の労働者が全国に増えて、一気に貧困が広がってしまいました。山本太郎さんは「小泉改革以来の、30年に渡る緊縮財政のために、日本はすっかりデフレの定着した格差社会になってしまった」と言っています。それに最近のコロナ不況で、社会全体の貧困が進んでいます。一時減っていた自殺者も増加しています。寄せ場で始まった餓死や凍死を出さない取り組みは、今現在はいくども食堂(近所の町内でもやっています)をはじめ、街中での様々な団体がやるまでになっています。食料の配給は(フードシェアとも言うようです)いたるところで行なわれています。「日本は金持ちの国」というのは、昔の話です。政治も身内ばかりが優遇される、発展途上国並みになっています。

田舎への若者の移住も進み、お金をあまり使わない自給自足やシェアの生活になり、お金至上主義の終わりかとも思います。都会人はスマホやロボットが行き渡って便利だけれども、生活力がなくなり、田舎人は自然の中でたくましく生きる、という二極化をするかもしれないです。

コロナの高齢者への接種が始まります。僕も67歳ですので、一足お先の接種ですが、皆さんもこのコロナ禍、なんとか生き延びましょう。ムゲンの前で満開の、たくさんの淡い色のアジサイの花を見ていると、心癒されます。今回は長めの梅雨が言われています。

発行の遅れのお詫びです。 2022年2月
お久しぶりでございます。

実は一昨年のムゲンニュースの印刷はとくにできているのですが、読者の皆さんへの発送がまだできていません。この去年のムゲンニュースの方はやっと印刷です。担当者多忙のために、遅れに遅れてしまいました。年に一回届いていたムゲンニュースが最近来ないと、訝しく思っていた方もいるかもしれないと思っています。ホントに申し訳なかったと思っています。この間寄付をしていただいた方もいらっしゃいました。本当にありがとうございます。